はじめに

百名山は自然の博物館！

これは日本百名山に登り、また世界各地の山を歩いてきた私がいつも思うことです。

百名山の自然の魅力は何でしょうか。一つ目は、多様性があることです。北海道から九州まで、日本列島を網羅していることで、日本の北と南や日本海側と太平洋側の自然の違いを感じることができます。同じ岩の斜面でも、そこではたらいている風化や侵食の作用は、寒冷地と温暖地で異なります。また同じブナでも、葉の大きさや幹の形は多雪地と暖帯地で異なります。

魅力の二つ目は、激しく変動していることです。山は隆起や噴火によって高まるとともに、風化や侵食によって低まっていきます。すべての山はそのプロセスの途中の段階にあります。百名山は標高が高いので、そうした地形変形作用もいっそう強くはたらき、変動が激しいのです。たとえば南アルプスでは、断層運動によって年平均４㎜ほどの隆起が起こっていて、これは世界的に見ても極めて速い速度で

す。また富士山では、崩壊地の一つの大沢崩れだけで年間15万㎥、一日に10トン積みトラック約60台分の石が落下して、山の形を変えています。

魅力の三つ目は、季節変化が大きいことです。一つの山でも、季節によって風景が一変します。百名山は地域のランドマークとなるような独立峰や高峰が多いので、季節変化の大きさはことさらです。夏には緑が生い茂りさわやかな空気を求めて登山者が訪れる北海道や東北地方の山は、冬には世界でもまれに見る多さの雪が降ります。百名山の山々は、四国地方や九州地方を含め、例外なく冬に積雪を見るのです。また地域を代表する山でもあるため、高妻山や石鎚山などをはじめとした修験に関わる山も多く、そうした修行の場である山では夏の岩場の険しさはもとより、冬の困難さが際立ちます。

こうした多様性、変動性、季節性に富んだ百名山の自然は、日本の自然の厳しさや美しさを表す象徴的な存在といえます。

本書で百名山としたのは、深田久弥が選定した「日本百名山」です。百山の選定にあたって、標高や歴史といった客観的な指標だけでなく、品格や個性といった主観に近い指標も用いられています。こうした主観的要素も入っているとはいえ、その選定はバランスがよく、日本を代表する名山として定着しています。私が選ぶとしてもほとんど同じ結果になるでしょう。どれも麓から見て美しく、登ってみても魅力ある山ばかりです。そんな日本を代表する名山を、ただ登るだけでなく、自然を少しでも知った上で登りたいという望みに、本書は応えます。

各山では、私が登った時に感じた不思議や、登山前に地図を見ていて感じた疑問を「なぜ」から始まるテーマとしました。本文では、まず地形や植生などの自然を大まかに見て、次にテーマの答えに結びつく内容について掘り下げ、最後に生活や歴史との結びつきに触れるように構成しています。写真はす

べて私が撮ったもので、山の全景をはじめ、自然を読み解くのに最適な写真を選びました。本文や写真の説明文には、地形や地質の専門用語もあえて使っています。なんとなくそこにある地形や岩石にも名前があると知ることは、自然の見方を深めることになるはずです。

本書を手に取っていただきたい方は、まず山の自然の景観や、その成り立ちに関心をもっている登山者の方です。仲間とおしゃべりしながら山頂を目指す山歩きは楽しいですし、汗を流しながら自分と向き合う登山も意義あるものです。それらに加えて、自然に親しみ、その成り立ちを考えながら歩くことができれば、山歩きはいっそう深いものになるのではないでしょうか。山の方から「ここを見て！」「これを知って！」と、声をかけてくるような対話を楽しめる感覚を、ぜひ共有できたらと思います。

さらに、これから山の自然に親しんだり、探究したりしていこうと考えている中高大学生にもおすすめできます。一口に登山といっても、気軽なハイキングから本格的な縦走、またロッククライミングや沢登りなどのバリエーションルート登山、さらにアイゼンや山スキーを使った雪山登山など、多くのスタイルがあります。山の楽しみ方には、風景を堪能したり、写真を撮ったり、または動植物を観察したりするなど、目的も多様です。本書で扱った写真も、そういった多様な方法や目的で登った際に撮ったものです。霧で景色が閉ざされている時には、目の前の花や石に目を向ければいいのです。そんな、あなたなりの登山のスタイルや楽しみ方を探るきっかけに、本書はきっと役立つでしょう。